

作文力

2021. 9. 29

「作文能力は読書の量に比例する」これは、曾野綾子氏の言葉である。私もそう思う。このことに関わって氏は次のようにも述べている。

最近の私の驚きは、多くの若者、中年たちが本を読まなくなったことだ。彼らはほとんど自分の考えを自由に文章で表現することができなくなってしまっている。(中略)すでに国民の多くが読み書きも不自由になっているのである。

(中略)多くの人々は、テレビや漫画で知識、教育、意志の伝達などができると思っているが、初歩的なもの以外は不可能だろう。文字を読むことから抽象概念を構築し、それを再び創造的に具象的なイメージにまで発展させるという操作には、独特の訓練の過程があるので、画像から得られる直接的な知識の分野ではとてもカバーしきれない。

「作文力は国語学力の総決算だ」という人もいる。それは、話す力、聞く力、読む力という国語学力の全てが作文には動員されるという意味であり、同時に作文力は、それらの個別の力を高めることなくしては実り得ないということでもある。

作文の力を高めようと考えている教師は、作文のみに力を注いでも大きな実りは期待できないであろう。読書も聞く力も話し合いも、それぞれ充実させなければ、作文の力はつかないのである。

曾野綾子氏は、次のようにも言っている。

漫画とテレビだけで人生を送る人と、読書で自我をつくる人との間には、まもなく深刻な「知的格差」が生じるだろう、と思われる。

「知的格差」は、すでに生じている。本を読むことを面倒がる若者、壮年が増えている。教師の中でも同様の傾向が生じ、教育実践が現象的かつテクニカルなハウツーレベルに下がることが危惧される。教育書の購買者の減少という事実もある。教育書や教育雑誌が売れなくなり、読まれなくなり、廃刊に追い込まれ、姿を消していくということのマイナスの大きさは計り知れない。

「七歳の児童たちの読書量が、将来の世界における英国の位置そのものである」これは、イギリスのブレア元首相の言葉である。卓見である。

曾野綾子氏は、「作文教育を重視して、し過ぎることはない」と言う。千金の重みがある一文である。高校1年生に、「中学校3年間で、作文を3回以上、課せられて書いたことがある人は？」とたずねる。挙手をするのは、どのくらいだろう。高校3年間についても同じことをたずねる。挙手をする割合はもっと下がるだろう。

普段から、毎回の授業の中で、書く時間が確保されていればいいのだが、現実はどうであろう。日常的に書いている上で、まとまった長さの作文を書くというのが理想である。書かなければ、書く能力は発達しようがない。当たり前のことである。